

## 救いを得させる神の力

使徒パウロの手紙は筋道立てて論理的に展開されているとよく言われる。ローマの信徒への手紙は特にそうであって、順序よく筋道をたてて論を進めて行く。その調子は確かに論理的であり明晰である。

そのことは、今、学んでいるローマ書 1 章 14 節から 17 節の文の流れの中にもよく見られる。次のように「なぜなら」という語を繰り返しながら、たたみかけるように話しを進めていく。「わたしは、ギリシャ人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果すべき責任がある・・・（なぜなら）わたしは福音を恥としない。（なぜなら）福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。（なぜなら）福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです」。

ユダヤ人がどんなに躓き反対しようと、ギリシャ人がそれを愚かとし嘲笑しようと、私は福音を恥としないとパウロは言う。それは何故か。なぜ福音を恥としないのか。彼はその理由を述べる。

第 1 にそれは、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、すべて信じる者に救いを得させる神の力であるからであるという。ここで「力」と訳されている語は原語では「デュナミス」で、英語のダイナマイト、ダイナミックはこの語から出て来た。

このパウロの言葉はキリスト教信仰の特徴をよく表している言葉である。キリスト教とは一言でいえば「福音」のことである。福音は、単なる人間の思想や哲学ではない。単なる一つの宗教的・道徳的教えというものでもない。それは、ユダヤ人であろうがギリシャ人であろうが、すべて信じる者を根底から変革する神の恩寵の力である、とパウロは言う。このパウロの主張は彼自身の体験から出た言葉であった。使徒パウロの、ダマスコ途上における劇的の回心こそはこの神の恵みをもっとも鮮やかに示す出来事であった。

なぜ福音を恥としないか。その第 2 の理由は、神の義がその福音の中に啓示されているからであるとパウロは言う（17 節）。キリストの福音において啓示されている「神の義」と何か。それは、罪人を義とする神の義、すなわち、何の義にも値しない、何の義も持ち合わせていない罪人を義として受け入れてくださる神の義のことである。それは神の救いと言ってもよい。神の恩寵と言ってもよい。

そのことを彼は 3 章 21 節以下次のように詳しく説明する。

「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を贖う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、ご自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです」（3 章 21～26 節）。